

『失樂園のトリニティ』

著: 藍生 有

ill: カワイチハル

バイトがない日、想太は母と夕食をとった。二人での夕食は静かで平和だった。それから部屋に戻らずリビングでテレビを見ていると、修一が帰ってきて食事を始める。

「ただいま」

次に帰ってきた真二は、リビングにだけ声をかけた。ダイニングにいた修一は無視だ。そのまま真二は二階へ上がって行った。

「またやってるわ」

母がため息をつく。修一も食事を終わると無言で席を立った。

ここ数日、修一と真二は顔を合わせても一言も口を利かず、お互いの存在をわざと視界に入れないように振る舞っている。それはまるで、クリスマス前に時間が巻き戻ったかのようだ。

「仲良くなったと思ったのにね。全く難しいわ」

「まあ一時的なもんだよ、きっと」

今回ばかりは想太も二人を放っておくことにした。原因は多分、自分絡みだ。

「そうだといいけど。真二ったらね、変なこと言い出すようになって」

「変なこと？」

「そうよ。あの子ったらね……」

母から話を聞いて、想太はすぐに立ち上がり階段を駆け上がった。

「おい、真二」

ノックもなしに真二の部屋を開ける。

「……いきなりどうした？」

制服を脱ぎかけていた真二が振り返る。

「お前、大学に行きたくないって言い出してんのか」

昨日、真二は父に、進学をやめたいと言った。母が教えてくれたその事実、想太はじっとしていられなくなった。

この時期に真二が何故そんなことを考えたのか、その理由を確認したい。もしその原因に自分が絡むなら、どんなことをしても説得したかった。

「……ああ、うん。ちょっと違う」

真二が口ごもった。

「違う？ 何が違うんだよ」

「寮に入りたくないだけだ」

「同じじゃないか。朝練に出るならうちからじゃ通えないぞ。車通学だって禁止だろ」

いやな予感がする。それでも聞かずにいられなかった。

「……もしかして、俺のせい、か」

真二は黙った。それが答えだった。

「そんな……なんでだ？」

「俺がいなくなっても、想太と修一はこの家に残る。それを想像したら耐えられない」
押し殺した声で真二が言った。

「何言ってんだよ、せっかくここまで努力してきたのに」

あんなにバドミントンが好きだった彼が、こんな馬鹿げたことを言うなんて信じられなかった。悔しくて情けない。まさか自分の存在が、彼の未来を邪魔してしまうとは。

「そんなの関係ない。俺には想太の方が大事だ」

曇りのない目には吸い込まれそうな力があつた。何も言えずに目を逸らさないと、この強さに逆らえなくなる。

「好きなんだ。想太だけは、俺を修一と比べない。だから俺はずっと、想太だけを見てきた」

真二の手が想太の手首を掴む。

「俺、修一にだけは負けたくない」

強い口調に顔を上げる。真二は忌々しげに唇を噛んだ。

「ずっと比べられて来たんだ。いつでも俺の前にはあいつがいて、俺はいつも勝てなかった。だけど想太のことだけは絶対に負けたくない」

優秀で万能な修一と一歳しか違わなかったため、真二がどんなことも比べられてきたのは知っている。それが辛くて、悔しかったこともなんとなく分かる。

だが想太は十歳まで一人っ子だったので、真二の抱えるものすべてを理解できているとは言いにくい。いきなりできた弟は、ただかわいい存在だった。だから真二がここまで修一に対抗心を持っていると気づけなかった。

「勝ち負けなんてどこで決めるんだよ。……大体、お前にはお前のいいところがあるじゃないか」

慰めるというよりも、事実としてはっきり伝えておきたくて口を開いた。

「どこだよ」

真二は瞬きせずに詰め寄ってきた。

「修一より俺のどこがいい？」

必死で聞いてくる彼が悲しい。確かに修一はなんでもできるけれど、真二だって負けていない。長所はたくさんある。

「なんでお前はそんなに自信ないんだよ。お前でそんななら、俺はどうなる？ なんの取り柄もないぞ。それでもお前は、俺を好きだって言ってくれるじゃないか」

口にしてから、その自虐的な内容に笑ってしまう。でも事実なのだ。想太には、修一と真二のように優れた部分はない。だけど、毎日を楽しく過ごせてきた。

「自信を持てよ。な、真二」

出来のいい弟が二人もいると、想太はいつも誇らしく思っていた。その一人が自分を卑下するのを放っておけない。

「でも……」

真二が唇を噛んだ。

「そのくらいにしておいたら？」

修一がドアを開けて立っている。彼はゆっくりと、優雅に思えるような足取りで真二に近づき、顔を近づけて言った。

「そうやって卑屈でいる限り、お前に勝ち目はないよ。いい機会だ、想太を諦めたらどうだ」

修一は真二の目の前で笑って挑発した。
「は？ 何言ってるんだよ、ふざけるな」
真二が修一に掴みかかる。
「お前みたいな子供じゃ、想太を壊すだけで楽しませてやれない」
修一は平然と真二の勢いを受け流した。
「弟でいいならそうしてろ」
「なんだと……！」
「二人ともうるさい！」
勝手に話を進めていく二人を大声で遮る。二人がこちらを見た。
「もういやだ。俺の気持ちを無視するな」
想太の剣幕に驚いたのか、二人が口をつぐむ。
空気がぴんと張っていて、沈黙が痛い。寒くないのに鳥肌が立つ。緊張に満ちた静けさを破ったのは、真二の呟きだった。
「想太は俺たちのどっちが好きなんだ。……はっきりさせてくれ」
「そうだな。どっちがいいかはっきり言ってくれれば、俺たちはこんなに揉めなくて済む」
修一までもが同調した。二人分の視線が突き刺さる。勝手な言い分をぶつけられて、頭が混乱した。
「選ぶって……無理だ」
どちらかを選ぶなんてできそうにない。どうして兄弟じゃ駄目なのか。すべてがぐちゃぐちゃだった。
張りつめすぎて、今にも爆発しそうな雰囲気から逃げたい。

本文 p164～171 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>